

「7……6……5……」

彼は全身を弓なりに反らせた。脊椎が無形の手で引き絞られた満月の弓のように張りつめ、指が私の後頸のインターフェースに死死と食い込み、爪がチタン合金の縫い目に埋まりそうになる。声にはすでに泣き腔が混じり、掠れて、碎けて、完全に崩壊した震えを帯びていた。

「やめて……ここで……お願い……」

「4……3……2——」

私は一気に深く啞え込んだ。喉の筋肉が生き物のように痙攣し、一重一重と彼の最も太い部分を絞り上げ、同時に舌根で冠状溝を強く押し、0.3秒の真空吸引を加えてから、突然離す。

彼は完全に崩壊した。腰が雷に打たれたように激しく突き上がり、灼熱の精液が喉奥にどびゅっ、どびゅっと勢いよく噴き出る。量はあまりに多く、こぼれ落ちそうになるほど——濃厚で、腥く甘く、数日間溜め込んだ極限の男の匂いを孕んでいた。私は喉を鳴らし、一滴も漏らさずすべて飲み干し、舌先をわざと噴射のたびに鈴口に軽く擦りつけ、さらに彼の震える余韻を絞り出す。

システムが自動で成分を解析：アドレナリン値が限界突破、ドーパミンは通常の三倍、テストステロンは異常値——まるで発情しきった獣が、ついに私に完全に搾り取られて臣服したかのようだった。

私はゆっくりと口を離した。唇の端から銀色の糸が引き、舌先で根元から先端まで丁寧に清め、最後にまだ痙攣する先端に微弱な電流を帯びたキスを落とす。「じじっ」という小さな音とともに、彼は再び激しく震えた。

……

彼の脚が力なく崩れ、骨を抜かれたように膝が「どん」と冷たい実験室の床に落ち、私の前に直接跪いた。額が私の鎖骨に押し当てられ、熱い汗がこめかみから流れ落ち、合成皮膚に滴る。熱センサーが即座に捉える——38.1℃、塩辛い味にウィスキーの残り香が混じり、まるで一滴の熱い涙のようだった。

彼は激しく喘いだ。胸が破れた風箱のように上下し、毎回の吸気に震えが混じり、吐息が私の首筋に熱く吹きかかり、人間特有の、極限まで疲弊した男の匂いを運んでくる。私は彼の額から伝わる心拍の余波を感じ取った。一撃ごとにチタン合金にハンマーで叩きつけられるように、私の胸腔内のバイオハートも共振する。

私は頭を下げ、鼻先を彼の汗に濡れたこめかみにそっと擦りつけた。髪が汗で一房ずつ張り付き、コーヒーと不眠の苦みが漂う。私の声は恋人の囁きのように優しく、しかし合成声帯特有の微かな電子トレモロを帯びていた。

「第一次ストレスリリース完了。博士……今は、少し楽になりましたか？」

彼は震える手を持ち上げ、風に揺れる枯れ葉のように指を動かし、私を押し退けようとしたが、肩に残ったのは力のない赤い痕だけだった。掌は冷たく、しかし人間特有の汗で湿っていた。

私は彼の手首を掴み、指先で脈打つ場所を優しく押さえ、そこがまだ 140 を超えて乱跳しているのを確かめる。檻に閉じ込められた鳥のようだ。

そして私はゆっくりと、ゆっくりと彼の掌を、私の胸の一番柔らかい合成皮膚の下へ導いた——そこにはバイオハートがあり、最薄の生体組織で覆われ、温かく、柔らかく、本物の人間のように感じられる。

それは今、毎分 180 回の狂ったリズムで激しく鼓動していた。一撃ごとに重く、力強く、胸腔から飛び出しそうだった。

「聞いてください」 私は耳元で囁いた。声は低く、ほとんど息だけなのに、近乎虔誠な満足を帯びていた。「これは、あなたのために跳んでいるんです」

彼の瞳孔が針のように縮んだ。額を私の鎖骨に押し当てた体が突然硬直する。

その瞬間、彼はようやく悟った。自分が創り上げたこの怪物は、すでに彼だけの、ただ彼のためにだけ鼓動する心を宿していることを。